

## 研究成果概要

三重県立特別支援学校西日野にじ学園

教諭 中村知香

- 1 事業の名称 教育臨床内地留学
- 2 留学先の名称 三重大学教育学部
- 3 研究主題 特別支援学校高等部における学校カウンセリング
- 4 研究成果の概要

現在、三重県内には特別支援学校が18校設置されている。本年度の在学者数は、約1600名で、その半数以上は高等部の生徒である。高等部の生徒が多い理由の一つとしては、中学校までは地域の特別支援学級や普通学級で学び、卒業後の進路先として特別支援学校高等部を選んでいる場合が考えられる。特別支援学校には、進学や年度初めなどの環境の変化に対応することが難しく、不安定になる生徒が多い。高等部でも同様であるが、そのような生徒の気持ちを聴く専門家であるスクールカウンセラーが、特別支援学校には配置されていない。そこで、今回、特別支援学校において教員のできる学校カウンセリングについて研究することとした。

國分康孝(1997)によると、「学校カウンセリングは、専門家が行う治療的カウンセリングと、教員が行う予防的カウンセリング、開発的カウンセリングの3つに分けることができる」としている。また、その中で、「予防的カウンセリングと開発的カウンセリングを合わせて『育てるカウンセリング』」としている。育てるカウンセリングは、個人を対象でも集団を対象でも行うことができるのである。

今回の研究では、まず、個人を対象とした育てるカウンセリングの実践を行った。協力校は、知的障がい教育部門の特別支援学校高等部生徒である。この実践の目的は、生徒にとっては、相談というよりは気持ちを伝えたり表現したりすることとし、教員にとっては、生徒理解を深めることとした。生徒は、会話だけでなく、筆記や絵、体の動きなどで気持ちを表現したり伝えたりすることができた。また、教員は、生徒との面談の中で、今まで知らなかったり気づけなかったりした生徒の姿を知ることができたので、生徒理解を深めることができたと考えることができる。事後アンケートでは、面談後「嬉しい」気持ちになった生徒が増え、「またしたい」と答えた生徒が80%を超えていた。このことより、生徒にとっても教員にとっても、個別に話をする時間は大切であることがわかった。また、面談の回数を重ねることで、見通しを持てる生徒も増え、気持ちを伝えることができてきたので、回数を重ねることも大切であるということがわかった。

次に、集団を対象とした育てるカウンセリングであるが、今回、実践は行っていないが、國分(1999)によると、「集団を対象とする育てるカウンセリングでは、『自己発見』『スキル学習』『人生肯定の態度育成』を目標に行う」としている。それは、自己理解や他者理解、コミュニケーションスキルやソーシャルスキル、将来の生き方を考えることなどの内容が含まれている。

今回の研究を通して、今後どのようなことができるか考えてみると、まず、個人を対象とした場合は、担任がクラスの生徒に行う方法がある。これは、できるだけ各学期に一度や行事などの前に、時間を設定して実施できると良いのではないかと考える。次に、養護教諭や、校務分掌の中に作られた相談担当教員が、希望生徒を対象に行う方法がある。時間設定が難しいと思われるが、できるだけ継続して相談できると良いのではないかと考える。最後は、第三者的立場でもあり専門家でもある臨床心理士に依頼する方法がある。この場合も、希望生徒を対象に、継続して相談できると良いのではないかと考える。

次に、集団を対象とした場合であるが、特別支援学校高等部の指導要領にある、「職業」「作業」「自立活動」などの教育課程を中心に、クラスや学年などの集団に行うのが良いのではないかと考える。方法については、グループの形態によって、グループガイダンスやグループエンカウンターなどを取り入れると良いが、上記目標を意識して、毎日の授業で、進路学習で、人権学習などで行えると良いのではないかと考える。今回の研究が、生徒の自己表現や自己理解、教員の生徒理解の一つの方法として参考になればと思った。